
IS 歪んだ世界

男の娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 歪んだ世界

【Nコード】

N5703Z

【作者名】

男の娘

【あらすじ】

死ぬはずではなかったのに死んでしまった？

神様がお詫びにISの世界に転生させてくれるらしい。

しかし、男ではなく女？

じゃあ、男にしてと頼んだら、男と女の体か宿る二重人格ならぬ二重体格になった。

しかし、転生した世界はぼくがいることにより歪んでしまった。

ぼくのせいで歪みが出来たならぼくがその歪みを正すまで。

作者の処女作です、至らない点もあるとおもいますが末永く見守っ

てくれると幸いです。

プロローグ（前書き）

ひよんな事から始めた作品ですが、どうか見てくれると嬉しいです。

では、I S 歪んだ世界どうぞ。

プロローグ

プロローグ

僕は起きると真っ白な空間にいた

「あれ、ここどこだ。」

「ここは、あの世とこの世の狭間だよ。」

なるほど、ここはあの世とこの世の狭間だそうです、ってどうしてそんなところに僕はいるの。

「死んだから。」

えー、僕は死んだのそんな〜。

「イヤーメンゴメンゴ、私たちの手違いで。」

えー、ちよつとどうゆうことですか、てか貴女誰ですか？

「あゝ、そう言えば自己紹介がまだだったね。私は神様だ。」

へー神様かゝ、って神様！？

「うん、神様」

あれ、僕今まで声に出してなかったよな。なんで神様はわかったん

だ。

「だって神様ですから」

神様なんでもありなのかよ、てか手違いって何。

「実はかくかくシカジカで」

つまり僕は死ぬはずじゃなかに、他の人と間違えられて死んだと。

「そういうこと。お詫びていってはなんだけど、新たな人生を歩ませてあげよう。」

新たな人生？

「そう、君の好きな小説で言う転生ってやつ。」

はあ

「で、何か能力が欲しいとかない。」

その前にどこの世界に転生するんですか？

「あゝISの世界だよ。」

ISかあれ好きなんだよね。

「君を転生させるとちょっと歪みが起きるけど何とかしてね。あと、転生すると君女だから」

え、女なのじゃあ男にしてください。

「それが出来ないんだよね。じゃあ二重人格ならぬ二重体格はどう？」

二重体格？

「細かいこと気にしない。他にほしい能力は？」

じゃあ剣と銃と武術の能力を上げて、あと運動能力とISの操縦技術と作る技術を。

「はいはい。あとはISを決めてね。」

ISは近接主体の状況によって変形する、ストライクみたいなもの、あとAIを乗せて。

「あいよ」

あと篠ノ之家の子供がいいな。

「生まれは無理だけど拾って貰うことなら出来るよ」

じゃあそれで

「わかったよ、じゃあ良い人生を。」

さようなら神様

「さようなら」

プロローグ（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第一話

「やあ、元気かな。」

拾われた結歌

「元気はいいよ、ははは」

狂った天才

次回

「出会いと狂いとあらわる天災」

お楽しみに

第一話 出会（前書き）

第一話です

第一話 出会

あれここどこ？

「オギヤーオギヤー」

あー、そう言えばわたし転生したんだった。
どうもわたしは篠ノ之結歌^{しののゆいか}です。

転生して路上で泣いていたところ東お姉ちゃんに拾われて篠ノ之家の子供として育てられることになりました。

「オギヤー」

隣にいるのは妹の篝ちゃんです。

わたしが拾われた1ヶ月後に生まれました。

この篠ノ之家の父は剣道の師範代だそうです。

神様に剣道のスキル貰つという良かったー。

大きくなったらお父さんに剣道を教えてもらうんだー。
楽しみ。

ガチャガチャガチャピン

この音は東お姉ちゃんが来たようです。

「やあやあ元気かなお二人さん」

「「ダアッダアッ」」

「元気のようにだね元気はいいよはっはっは」

高笑いしてどっか行きました。何したかったんだろう？

お姉ちゃんは天才らしいんですが、わたしには変人にしか見えませ

ん。

こうしてわたしの篠ノ之家での生活が始まった。

第一話終わり

第一話 出会（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第二話

「なにこの数字列」

始まる開発

「これわかるのゆいちゃん」

ばれる才能

次回

「睡眠と理科とI S 開発」

お楽しみに

第二話 開発（前書き）

第二話です。
どうぞ

第二話 開発

どうも結歌です。

わたしは小学生になりました。

今は篠ノ之道場ど剣道の稽古をしています。

道場って言っても門下生が三人しかいないんですがね。

三人の内二人は分かりますよね、もちろんわたしと箒ちゃんです。

もう一人は原作の主人公キング・オブ唐変木の織斑 一夏君です。

お姉さんの影響で剣道を始めたそうです。

さすがシスコンですね。

「お姉ちゃんもうそろそろ終わりにしよ。」

あ、もうそろそろ千冬さんが迎えに来る頃ですね。

ちなみにいまお父さんは用事で出掛けているので時間が来たら終わらせてと頼まれました。

「そうですね。もうそろそろ終わりにしますか。」

ちなみにわたしは、剣の才能を神様に貰ったのでこの中で一番強いです。

「ふう、疲れたぜ。」

「一夏あ」

ちょうど良かったですね。

千冬さんが迎えに来ました。

「ちょうど良かったです

ね。今終わったところです。」

「そうか。よし一夏帰るぞ。二人ともありがとな。」

「はい。お疲れ様でした一夏君。」

「バイバイ一夏」

「おう、じゃあな箒、結歌さん。」

何で箒ちゃんは呼び捨てなのにわたしはさん付けなの。まっいいか。

「箒ちゃん帰ろうか」

「うん」

相変わらず箒ちゃんは可愛いな。

「「ただいま。」」

「お帰り、箒ちゃん、ゆいちゃん。」

「ただいま姉さん」

「ただいま、お姉ちゃん。お姉ちゃんまた部屋にこもってたでしょ。」

「

「うんまあね、あはは」

お姉ちゃんはここんとこずっとこんなんです。

学校から帰って来たらずっと部屋に居ます。

「なにやってんの」

「二人にはまだ早いよ」

早いってことはたぶんISのことでしょうね。

「そうなんだちゃんと寝てね。」

「わかってるよ。」

わかってるんでしょうか、目下にすごい隈が来てます。

「じゃあ、ご飯できたら呼ぶから。」

「うん、分かったよ。」

「箸ちゃん行こう。」

「うん。」

「バイバイ。」

今日はお母さんにお料理を教えてくださいます。

「「お母さん」」

「お帰り二人とも、じゃあ手洗って来てね。」お母さんは優しい人です。

それに料理も上手です。わたしもこんな人になりたいです。

「わかった、お姉ちゃんいこ。」

「うん。」

30分後

「ゆいちゃん、ご飯できたから、お姉ちゃん呼んできて。」

「はい。」

私は手を拭いてお姉ちゃんの部屋に向かいます。ちなみにお姉ちゃんの部屋はわたしの部屋の隣です。

コンコン

「お姉ちゃん、ご飯できたよ。お姉ちゃんー。」

返事かない、寝てるのかな？

「お姉ちゃん入るよ。」

ガラガラ

お姉ちゃんの部屋は薄暗く本やら何やらで散らかってます。
パソコンの前にお姉ちゃんはいました。

「お姉ちゃん。」

何かに真剣になっててわたしの声に気づいてないようです。
パソコンを覗くと何かの数字の列があります。

「これは何かのプログラム？でもいろいろ間違えてる。」

「ツッ！？ゆいちゃんこれ分かるの？」

「え、あ、うん少しだけ。」

これはISのプログラム？神様にISの技術もらって良かった。

「本当だ。……すごいねゆいちゃん！」

まあ神様のおかげだけど。

ああ、お姉ちゃんにナデナデされてる

「そうかなあ、えへへ。」

「そうだよ。」

「あ、それよりご飯だよ。いこつ。」

「うん。」

次の日からISの作成を手伝わされることになるのです。

第二話 開発（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第三話

「おーい、一夏」

新たなる出会い

「お姉ちゃんこういう本持ってるよ」

知らされる真実

次回

「友情と真実と新たな出会い」
お楽しみに

第三話 友情（前書き）

短いですが第三話です。
どうぞ

第三話 友情

おはようございます。

結歌です。

わたしはいま箒ちゃんと一緒に登校中です。

あ、一夏君です。

「おはよう一夏。」

「おはようございます一夏君。」

「おう、二人ともおはよう。」

二学期になり学校にも慣れて来ました。

こんなやりとりも毎日のことです。

「おーい、一夏あ。」

誰かがこっちに向かって走って来ます。

あれ、この人は確か同じクラスの佐藤優斗君だっけ。

「お、おはよう優斗。」

「おはよう一夏。おはよう篠ノ之さんたち。」

「「おはよう」」

「一夏君いつの間に仲良くなったの？」

「いやさー、優斗が面白い本持ってた。」

はあ、一夏って本当単純だよな。

「一夏これ昨日の続き。」

「おう、ありがとう。」

何々、あ、これガンダムの小説じゃん。

アニメで見ました。

「優斗君、これアニメでやってたよね？」

「篠ノ之さん知ってるんですか？」

「うん少しだけ。」

やっぱりやってたんだ。

面白かったなー。

確か主人公はキラ・ヤマトだっけ。

「知ってる人がいたんだね。」

今度ガンダム創るか。

「お姉ちゃんのお部屋にそういう本いっぱいあるよ。」

なに、何故知ってるんだあ箒ちゃん。

あれは本棚の一番奥において前に本を二重においたはずなのに。

「何で箒ちゃん知ってるのかな？」

「お姉ちゃんが読んでもの見たから。」

「うゝ、何で知ってるの知ってても言わないでよ。」

「ご、ごめんねお姉ちゃん泣かないで。」

泣いてないもん。

「じゃあ手繋いでくれたら許してあげる。」

「うん、はい。」

あー箒ちゃんの手柔らかいし暖かい。

「えへへ。」

「お姉ちゃん許してね。」

「うん。あ、優斗君ってスタイル良いよね何かスポーツやってるの？」

「うん、アーチェリーを少しね。」

へーアーチェリーかカッコいいな。

キンコンカンコンコン

「大変チャイムだ、早くいこ。」

これが佐藤優斗との出会いであった。

第三話終わり

第三話 友情（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第四話

「こいつがリボンしてたらおかしいかよ」

怒る一夏

「君たちはどんな声でなくかな」

キレる結歌

「よろしくね」

新たな友達

次回

「怒りて友達と転校生」

お楽しみに

第四話 友達（前書き）

第四話です。オリキャラが出てきます。では、どうぞ

第四話 友達

時は流れ二年生になりました。

「今日は、転校生を紹介します。」

転校生が入ってくるとクラスがいきなり騒がしくなりました。

わあ、瞳がアリアみたい。

「転校生の夜長桃華よながももかです。よろしくお願いします。」

転校生こと桃華ちゃんはきちんと一礼して席につきました。

黒髪にアリアカラーの瞳可愛いな。

「では、授業を始めます。」

ハアーまたつまらない授業が始まります。

ISの理論を作りますか。

ポッパ

休み時間

「ねえ、君どこ生まれ。」

「え、あ。」

「どんなことが好き？」

「あ、えーと。」

「黒髪に赤い瞳、ハアハア。」

「ひっ、」

休み時間になると、クラスの人たちは、一斉に桃華ちゃんに質問しています。

てか最後の人は質問じゃないでしょう。

「あーゆうのってバカだね。一人一人言わなきゃわかんないのね。」

「そうだねー。」

まあどうでもいいや。

さて続きやりますか。

「お姉ちゃんまたそれ？授業中もやってたでしょ。」

おっ、さすが箒ちゃんよくみてるな。

「うん、そうだよ。」

「なあ、なんだそれ。」

「僕も知りたいな。」

「私も。姉さんとなんかやってるのに関係あるの？」

「まだ三人には、早いよ。」

そう三人には、早すぎる。

「なんだよそれ。まあいいや。」

「そういえば今日はどうする？皆暇でしょ。」

今日は剣道の稽古もないし暇だな。

「じゃあ一夏の家行く？」

「いいぜ、俺んちな。」

「うん、じゃあ明日は休日だし、泊まろかな。」

千冬さんの部屋も掃除しなきゃいけないしね。

「いいぜ、じゃあ一緒にご飯作ろうぜ。」

よし、なに作ろうかな。

「うん、じゃあ材料買っとくね。」

「ああ。」

「箒ちゃんも泊まる？」

「うん。」

よし、決まったね。

私は午後もしSの理論をたててました。

1ヶ月後

「おい、外人なんか言えよ。」

「おい、男女。今日は木刀持っていないのかよ。」

「日本人です。」

「……竹刀だ。」

「へっへ。お前みたいな男女には武器がお似合いだよな。」

「……。」

「お前目の色変だもんな。」「しゃべり方変だもんな。」

あくまたやってるよあいつら、目の色ならわたしも一緒だろうってーの。

まあ、言ってきたても、泣かすから無駄だろうな。

「やーい外人。」

「やーいやーい男女ー。」

あーうっざいなー、掃除してんのに邪魔だなく。

「…うっせいなあ。テメーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

「…そうだよ、カスがバカはとっとと消えろ。」

一夏君も怒っている様だ、まあ私も限界寸前だけど。

「なんだよ織斑お前こいつの味方かよ。」

「へっへっ、この男女が好きなのか？」

「お前も外人のくせになめんなよ。」

「頭がちよつといいからって調子にのんなよ。」

ハァー、本当こうゆうバカは嫌いだ、て言うかテメーらとわたしの頭脳は月とスポンぐらいの差があるだろが。

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔、どっか行けよ、うぜえ。」

「そうだよ、どっか行け、もしくは死ね。」

「へっ、真面目に掃除なんかしてよー、バツカじゃねーのーおわっ！？」

「外人がテメーが死ねーうお！？」

いきなり箒ちゃんと桃華ちゃんが男子の胸ぐらを掴みました。

箒ちゃんは一夏君が好きだから怒っているんだろうけど、桃華ちゃんは何で怒ってるんだろう。

まさかわたしのため、そうだったら嬉しいな。

「真面目にすることの何がバカだ？お前らのような輩よりは、はるかにましだ。」

「私たちは外人じゃない、あなた達が消えて。」

「な、なんだよ…何ムキになってんだよ。離せよ。」

「ざけてんじゃねえよ、離せよ。」

あーあ、男子二人がもがいています。箒ちゃんをバカにするのがいけないんだよ。桃華ちゃんも力強いな。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら夫婦なんだよ。知ってるんだぜ俺、お前ら朝からイチャイチャしてるだろ。」

「こいつら、女のくせに女が好きなんだぜ。こいつ、この前男女に抱きついてたぜ。」

「外人なんて授業中ずっと篠ノ之のこと見つめてたぜ。」

うわっ、バツカだなく、女が好きって確かに男よりは好きだけど、妹に抱きついて何が悪いんだよ。て言うか桃華ちゃんがわたしを見てたって嬉しいな。

「だよなく。このなんか、こいつリボンしてたもんな！男女のくせによー。笑っちゃまーぶごっ！？」

「外人どものくせに俺らと同じ髪の色してんじゃねえよ、テメーらにはハゲがーくべっ！？」マジでキレました。

外人だから黒髪がだめとか法律にあんのってーの、だいたい外人じやないし、乙女にハゲが似合うとか論外だろ。殺す。

一夏もあれだけ言われたらねー。

「笑う？何が面白かったって？あいつがリボンしてたらかしいかよ。すげえ似合ってただろうが。ああ？なんとか言えよボケナス。」

「外人じゃねえって言ってんのよ。だいたいテメーら下等生物が真似したんだろうが。この子が黒髪で何が悪い、すごく可愛いだろうがクズが殺すぞ。」

「お、お前らっ！！先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前らは全員ぶん殴る。」

「面白い言えるなら言えよ。まあ生きてるかわかんないがな。さて、君たちはどんな声でなくのかな。」

やっぱ面白いのはは。

10分ぐらいしてから先生達が来ました。

一夏は三人に圧勝、わたしは三人をフルボッコにしました。

そのうち二人は骨折したそうです。

そのせいでわたしは一週間謹慎処分です。

まあお姉ちゃんのおかげでそれだけですみました。

処分明け

「ごめんなさい、私のせいで。」

「いいよ、だいたいわたしが怒って殺っただけだし。」
（漢字間違
いではない）

「で、でも」

あーめんどくさい。

「じゃあ友達になってそれでいいよね。」

「えっ」

「友達は助けるのが普通でしょ？」

「うん。」

「よろしくね。桃華ちゃん」

「はい、よろしく。結歌ちゃん。」

こうして私は桃華ちゃんと友達になった

第四話 友達（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

予告

「私の子を否定するなんて」

起こる束それによりとある事件が起こるそして別れる友たち。

第五話

「バカと怒りと白騎士事件」

お楽しみに

第五話 事件（前書き）

第五話白騎士事件です。

千冬の戦闘？シーンはありますが第五話どうぞ

第五話 事件

どうも、結歌です。

わたしは四年生ですが、もうすぐ五年生です。

そして、お姉ちゃんとISの開発を始めてはや四年、ついにISが完成しました。

そして今日は発表の日です。

といってもわたしは学校なんで行けないですけどね。

ショボーン

でも、お姉ちゃんが、

「製作者のところにゆいちゃんの名前も入れといたからだいじょうブイブイ。」

って言ってました。

ISが認められたらわたしテレビに出るのかなー？

ってISは、認められず、お姉ちゃんが怒って白騎士事件起こすんじゃない？

ってことはわたしもお尋ね者ヒエー。

まあいいか。

お姉ちゃんについて行けば安心だし。

でもそうしたら箒ちゃんや一夏君千冬さんにお父さんお母さんに会えなくなるのかー。

あれ、そう言えば神様に男にしてって頼んだら、

「じゃあ二重人格ならぬ二重体格にしてあげる。」

って言われなかったっけ？

って言うか二重体格って何？

二重人格は二つの人格でことだから、二つの体格？

つまり、男と女の体、うーんどういうこと？

まあお姉ちゃんにでもたーのも。

今は授業に集中しよ。

ポッパ―

「お姉ちゃんただいま。」

あれから時間がたち、わたしは家に帰ってきました。

「おゝかゝえゝりゝ」

うわ、なんだかすごく怖いです。

どうせISが認められず、お姉ちゃんは怒っているんだろうな。

「ど、どうしたの、お姉ちゃん。」

「あのクズども、私達の子を否定しやがって。」

まあ仕方ないだろうな。だって十五歳と十歳の女の子に今までの兵器を上回る性能を持った、ものを造られたんだから抵抗するよね。

「よし、あれをやろう。」

「あれって、もしかしてあれ？」

「うんあれ！」

あれとは、私が事前にISが認められなかった時に、世界にISを認めさせる作戦、ケースE579のこと、そう白騎士事件です。

「うふふ、これで世界は私達ね子を認めざるおえない。けっけっけ。」

「

お姉ちゃん怖いです。

「はあ、仕方ないな、じゃあ、千冬さん呼んで来るから。」

「うん、よろしく。」

ポッパ―

「なんだ東。」

わたしは千冬さんと呼んで来ました。
ふう、疲れた。

「やあ、ちーちゃん良く来てくれたね。」

「何で呼んだと聞いているんだ。いま、一夏と遊んでいたというのに。」

ここからはわたしは必要ないので、白騎士の最終調整でもしていますか。

うーん、ここをこうして、っと。

「はあ？何を言っているんだお前は。」

「まあまあそう言わずに。」

あ、終わっちゃった。

ラノベでも読んでますか。

「はあ。お前バカか？」

「まあ良いではないか良いではないか。」

あー、ガンダムUC面白い。

「はー分かった、手伝えばいいんだろ。」

「やったね、ゆいちゃん白騎士調整して。」

おっ、終わったか。

「もう、終わってる。」

「さすがゆいちゃん。」

ハッキングの用意してっと。

「じゃあちーちゃん、装着してね。ヒイッティングとフォーマット
すませるよ。」

ポッパ

「ふう、完了っと、どうちーちゃん。」

「ああ、さすがだな束。私の思うように動く。」

「そうでしょやったね、ブイブイ。」

「さっそくつですいませんが。行けますか千冬さん。」

「ああ、行けるぞ。」

「じゃあ。」

「うん、そうだね。」

「ああ、織斑千冬、白騎士いくぞ。」

「じゃあ、お姉ちゃん、いくよ、」

「うん。」

「「スイッチオン」」

ポチ

よし、わたしの仕事はもう終わり。

じゃあ逃げる準備でもしますか。

箒ちゃんの部屋にお別れの手紙をおいて。

台所にはお母さんとお父さんへ。

あと、本棚を量子化して、量産しておいたコアを置いて、この家とおさらばか、色々あったな。あつ、ちようどよく千冬さんが帰ってきました。

「お疲れちーちゃん。」

「ああ、」

わたしは千冬さんから白騎士を返してもらって、解体します。

あと、コアを初期化して。

「終わったよ、お姉ちゃん。」

「うん、分かったよ、じゃあお別れだねちーちゃん。」

「シリアス風に言うな、お前はいつでもどこでも、「ちーちゃん」っていつてくるだろ。」

さすが千冬さん、お姉ちゃんのことを分かってます。

「じゃあ、一旦バイバイちーちゃん。」

「ああ」

さて何処に行きますかね。

少しの間はアパートかな。

「では、さようなら千冬さん。あと、一夏にまた会いに来るって、伝えといて下さい。」

「ああ、分かった、束を頼んだ」

「はい。」

「ひどいよーちゃん普通逆じゃないの。」

まあ、ほっというて。

こうしてわたし達の逃走生活が始まった。

第五話 終わり

第五話 事件（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第六話

「本当に男の子の体があったよ。」

見つかる真実

「これはIS？」

見つかるIS

／／／

見られる裸

次回

「男と女とチェーンジ君」

お楽しみに

第六話 男子（前書き）

今日は大晦日ですね。
どうでもいいけど
第六話です。どうぞ

第六話 男子

どうも結歌です。

今はISを発表してから一ヶ月。

全国の小学校では春休みが始まるころです。

そんな日でもわたし達は、大忙しです。

「お姉ちゃん、撃たれるよ」

「はっはっは、さすがの私でも困ったな。移動式ラボをミサイル型にしたのがいけなかったかな？」

「だから言ったじゃん絶対ダメだって言ったじゃん！そんなことより、逃げなきゃ。」

「そうだね。」

大忙しです。

ポッパー

「はあ、なんとか逃げられた。けど、ミサイル型は無しだよ。」

「え、ブウブウ。仕方ないな、じゃあ人参は？」

うーん、まあそれならいいよね。

「いいよ。」

「え、いいのって、えっ！いいの？」

何でそんなに驚くの？

別に人参なら撃たれないからいいじゃん。

「別にいいよ。」

「あつ、そうですか。（てきとうに言ったつもりなのに、まあいいか。）」

それにしても何もないと暇だな。

ろくに買い物にも行けないし。

「あー、暇だな。お姉ちゃん学校行きたい。」

「それは無理なんじゃない。」

やっぱり無理か。

あつ、そうだ。

「お姉ちゃん、男の子になれば行けるかな？」

「えっ、男の子？」

「そう、わたし二重人格ならぬ二重体格なの。」

「えっ、二重体格？」

「そう、二重人格は、二つの人格でしょ。わたしのは男の子と女の子の体があるの。」

わたしもよくわからないけど。

「じゃあ、男の子になって。」

「えっ、うー。わたし体かえられないの。」

「えー、じゃあ行けないじゃん。」

「だから何かつくってお願い。」

「グハッ！（上目遣いでお願いは禁止だよ。）」

えっ、お姉ちゃんが吐血した。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「うん大丈夫だから待ってて。」

二日後

あれからお姉ちゃんに色々本当色々、調べられて、本当に男の子体があることがわかりました。

今は、お姉ちゃんに女の子と男の子の体が入れ替わる装置を作ってもらってます。

「ふう、ゆいちゃんできたよ。」

おっ、できたようです。楽しみ。

テケテケ。

どれどれ、うわっ、なにこれ首輪？

「これは、ゆいちゃんの意識まあ、ぶっちゃけ言うと魂？を一回この機械に取り込んで、その間に体をチェンジしてその体に、さっき取り込んだ魂？を入れる装置だよ。」

うわっ、すごいな。

やっぱり天才（天災）だ。

「うわっ、すごいね。」

「そうだね、すごいんだよ。でも、使うと両方の体が成長遅れるから。」

えー、それはやだな。

でもみんなと会えるならいいか。

元から小さいし、胸はどうせ小さいんだろうし。

「いいよ。元から小さいし。ありがとねお姉ちゃん。」

「うん。」

よし、転校の手続きしなきゃ。

まず、戸籍を偽装作成して。

ポップー

よし、終わったー。

あ、そういえばどうやって学校に行くんだろう？

「ねえ、お姉ちゃん。学校までどうするの？」

「前買った（奪い取った）一軒家にワープ装置置いたから、このワープ装置に乗れば行けるよ。」

うわっ、すごい用意周到だな。

でも、これで学校に行ける。

「ありがとね、お姉ちゃん。」

「うん、他にも困ったら、お姉ちゃんに任せなさい。」

「じゃあ、片付けして。」

「えっ、それはできないかな？」

まあ、いいや。

よし、一回使ってみますか。

どう使うんだ？

あゝここを回すのか。よし。

この装着何か奴隷の首輪みたい。

「お姉ちゃん、回すよ。」

「うん。」

カチ

ダイヤルみたいなのを回すと、わたしの体は光に包まれ、光が収まると、

「うっ、うゝん、成功かな、あっ……」

うゝん、成功らしい。

あれ？お姉ちゃんの顔が赤くなってる？

「どうしたの？」

「あっ！あっ！あっ！」

お姉ちゃんは、あっあ言いながら、わた、ちがかった、ぼくの体を指差してます。

ぼくの体に何かあったのかな？

そう思いぼくの体を見ます。

「なっ、なんで裸なのゝ」

お姉ちゃんが赤くなったのは、ぼくが裸だったからか。

それにしても、髪長いし、声高いし、鏡見ると女顔だし、本当女の子みたい。

てか、体白いなー。

足もお腹も腕も、ってえゝえ！

左腕に、「これ〇ゾ〇ビです〇？」の、ユ〇のガントレットみたいなものついてるし。

「お姉ちゃん、なにこれ。」

「うゝん、調べてみようか？」

「うん。」

ポッパ―

あれから色々調べた結果。

このガントレットは、ISだそうです。

しかも、今の技術では、ありえない機能ばかり。

ということは、これが神様が言ってたISか。

しかし、ガントレット邪魔だな。

これ消したりできないのかな。

無理だよな。

って、うわっ、消えた。

でもつけてる感覚はある、ってことはステルスか。

「すごいね、このIS。でもなんでこんなの持ってるの？」
うっ。

「さあ。」

「ふーん、まあいっか。」

ふう、さすがに神様にもらったとか言えないよね。

「それより、なんか服ないの。恥ずかしいよ。」

「女の子用しかないよ。」

まあ、着れるならいいや。

今度買いにいこ。

「お姉ちゃん、ISも一緒に移動するようにしといて。」

「うん、わかったよ。」

これで学校に行ける。

一夏や優斗、千冬さんに桃華に会える。

そういえば、五年生になるのか。

五年って言えば、鈴ちゃんが転校してくるな。

仲良くなれるかな？

楽しみ。

こうして、ぼくの新たな生活が始まったのであった。

第六話 終わり

第六話 男子（後書き）

誤字、脱字、感想、アドバイスをありがとうございましたらよろしく願います。

では、よいお年を。

第七話 転校（前書き）

第七話 鈴が登場します。

第七話 転校

四月、新たなる始まりの月。
どうも、結渡です。

ちなみに、名字は夢音です。

またちなみに、人の夢で届くような音、という意味です。

クラスは情報操作して一夏と同じクラスにしてもらいました。

優斗は……隣のクラスか。まあいいや。

あつ、鈴ちゃんだ、挨拶でもしとこうかな。

「ハアハア、二人ともおはようございます、私は二人が入るクラスの担任の、緒方です。よろしくね。」

また、緒方先生担任か。ちなみに、緒方先生は、1、2、3、4年と担任です。

「よろしく願います。」

「よ、よろしくおねがいシマス。」

鈴ちゃん、まだ日本語になれてないから、囁んじゃってる。

「結渡君、^{フアン}鳳さんはまだ日本に来たばかりで、日本語がよくわからないから仲良くしてあげてね。」

本当、優しい先生だな。

「はい、」

「ありがとう。あつ、もう教室だね。呼んだら入ってね。」

「「はい。」」

先生は教室に入っていました。

さあ、挨拶でもしますか。

「^{フアン}鳳 ^{リンイン}鈴音さんでっあってるよね、ぼくは夢音 結渡、よろしくね。」

「よ、よろしく。」

「一応中国語話せるから、気軽に話しかけてね。」

「ありがとう。」

「どうぞ、入ってきて。」

「呼ばれたね、行こう鈴音さん。」

「鈴、」

「え?」

「鈴でいい。名前、呼びにくい。」

「そう、じゃあ行こうか、鈴ちゃん。」

「うん。」

ガラガラ

さて、一夏は気がつくかな?

「失礼します。」

あれ、一夏した向いてる。

つまんない。

「じゃあ、自己紹介して。」

「はい。」

あれ、一夏が反応した。まあ、声同じだし。

「唯火学校ゆいかがっこうから転校してきました。夢音 結渡ですよろしく。あつ、

ちなみに、女の子ではなく、男の子なので、間違えないでください
ね。」

ガタッ

お、一夏が驚いてる。

ちよっとからかってみますかな。

「一夏君、自己紹介の途中に立っちゃダメだよ。」

「え、あつ、ああ。」

ちっ、素直に座りやがった、つまんない。

「え、一夏の友達?」

他が引っ掛かりやがったか。

「違うよ、最初ってほとんど名前順で座ってるでしょ。だから、配
られたクラス分けの紙で見てね。」

「スゲー。」

実際には知ってるんだけどね。

まあ、できるけど。

「ハイハイ、次、凰さんよろしくね。」

鈴ちゃん大丈夫かな？

「ファ、凰^{ファン} 鈴音^{リンイン}デス。日本に来たばっかなので、日本語よくわからないケド、よ、よろしくねお願いします。」

「あ、話すときはゆっくり話してあげてね。」

「じゃあ二人は空いてる席に座ってね。」

ぼくは、桃華ちゃんの隣じゃん。

あ、一夏こっち見てる、まばたき信号で、

「後で話さく」

と、

「結歌ちゃんよろしくね。」

「気づいてたんだ。でも、今は結渡だよ。」

「じゃあ、よろしくね。」

「うん。」

ポッパ―

あれから時間がたち、ぼくは今、男子トイレにいます。

「今までどこいった、何で男なんだよ。てか、唯火学校ってなんだよ。」

あー、うるさいうるさい。

答えてやるから。

「最初のから教えるよ。まず、ISのニュースは見た？」

「ああ、束さんが作ったやつだろ。」

ズルッ、何でそこまで見ててわたしの名前出ないの。

「ISの製作者はお姉ちゃんとわたしなの。」

まったく、本当バカだな。

「へーって、うそ。えっ、お前がIS作ったのか。」

「しー、あんまり大きな声で言わないで、だからわたしも指名手配されてるの。だから逃げてたの。」

「そうだったのか。」

ふう、疲れた。

まあいい次だ次。

「で、男なのは、女だと指名手配されてるから男なら大丈夫だろうってこと。」

「へー、まあそれほど変わってないけどな。」

「うっさいなー」

一番気にしてること。

「それより、何で男になれんだよ。」

あーめんどくさい。

「これこれ」

ぼくはチェーンジ君をさす。

「それがなんだ？」

はー、何でわかんないの？

話聞いてればわかるでしょ。

「これが、女と男を変える装置なんだよ。」

「はーなるほど。」

やっとわかったか、疲れた。

「それなら、口調変えろよ。」

それもそうだな。

「わかった、精進する。」

「おう。」

「そして、唯火学校は、そっちのほうが気づきやすいかなって思ってた。」

「なんだそれ。」

「へー、一組の転校生って、篠ノ之さんだったんだ。」

えっ、今の声は、優斗？

「優斗、何でいるんだよ。」

「いちゃ、いけないかな？」

いや、そういうわけじゃないけど。

「友達なんだし、良いんじゃないかな。だいたい、見たらわかるよ。」

それもそうだな。

「じゃあ、他の人にはぼくの事内緒だからな。」

「わかったよ。」

キーンコーンカーンコーン

「チャイムだ、戻ろうぜ。」

そうだな戻るか。

こうしてぼくの学校生活は始まった。

第七話 終わり

第七話 転校（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしく願います。

次回 第八話

「なんで女子の制服!？」
すり替えられた制服

「お前女子じゃなかったの!？」
間違えられる性別

「これからよろしくな」
新しい友達

次回

「中学と遅刻と女子用制服」
お楽しみに

第八話 中学（前書き）

第八話 弾君の登場です。

第八話 中学

どうも、結渡です。

小学校も卒業して、今日から中学生です。
さて、制服着て。

カチャ

やっぱり、この中学の制服のスカートは可愛いなく、

……ってころ〜。

「お姉ちゃん、何で女子の制服になってんの？」

プンスカプン

「イヤー、可愛いかなって、似合ってるから大丈夫」

「お姉ちゃん、制服どこやった？」

ぼくは、少し殺気を出して聞きます。

「ごめんなさい、捨てちゃいました。てへ。」

捨てちゃった？

ハハハハハハ

「てめえ、じゃあぼくは何着てけばいいんだよ。」

「えーっと、あつ、それ着て——」

「てめえ、なめてんのか、ぼくは男だ。これ着てったら、ただでさえ女みたいなのに完璧に、勘違いされんだろうが。」

本当、幼児体型に女の子みたいな顔なんだから。下手したら、幼稚園児だと思われる。

「ごめんなさい、それしかないから、明日までに買って来るから。」

はー、もういいや。

ここでなんだかんだ言っても制服は、帰ってこない。

どうせ、一夏達がフォローしてくれる。

「はー、もういいよ、これ着ていくから、でも、買ってきてね、頼むよ。」

「うん、わかった。」

「女子のじゃないからね。」

「えっ、わっ、わかってるよ、ば、バカにしてるのかな。あははは。」

「わかってんのかな、不安だ。」

「じゃあ行くか、……って、大変もうこんな時間。」

「（女の子だと思われるとか言ってるわりに、しゃべり方女の子みたいになってる。）」

どうしよう、一夏達は先行っただろうから大丈夫。
仕方がない、最速タイムだすまで。

「お姉ちゃん行ってきます。」

「いってらっしゃい」

まず、ワープ装置起動。

そして、設定完了。

ポチ

成功

「ヤバイよ、入学式で遅刻とかないよ。」

そういいながら家の廊下を走る、靴はいて。

ガチャ

どうしようあと五分、わたしの学校までの最速タイムは六分。

最速タイム更新するしかない！

「とりゃあ〜」

「うお！」

えっ！

どん

「キャ」

「うわ！」

いったゝ、

「大丈夫か？」

「あつ、はい、大丈夫です。わたし急いでるんで、すみませんでした。」

いっそげゝ

「おい、ちょっと、」

何か言ってた気がしたが、今は無視だ。

初日から遅刻したら、夢の生徒会に入れないよ。

入学式はギリギリセーフ

でした。

今は各自自分達のクラスへ向かっています。

わたしのクラスは、一夏と一緒にだね。

おっと、着いた、席順は男女交互で指定された席です。

つまりわたしの前後は女子なので、周りから見ると、女子が三人並んでるように見えてって、あれゝ、わたしの前後男子だよゝ。

あれ、名前が『結渡』じゃなくて『結歌』になってる。

おかしいな。

あのくそ姉っ、やりやがったな。

学校のデータベースにハ

ッキングして、ぼくの性別女にしゃがった。

「おっ、席はここか、ん？おい、なに泣いてんだって、あー、あんたさっきの女の子！」

うるさいな。わたしは泣いてなどいない。

ただ、って、あー、

「さっきの、あっ、ごめんなさい。急いでで。」

「いいって、あっそれよりこれ、落としてたぞ。」

えっ、あっ、本当だハンカチなかった。

意外と優しい人だな。

って、弾じゃん！

「ありがとう。」

「それより、なんで泣いてんだ。それより、女の子があんなハンカチ持ってるなんてな。」

言ったな、二度も言ったな、親父にも言われたことないのに、って、親いないんだけど。

「わたしは男だ。」

「えっ、でも女の制服。それに名前と席も。」

「うっ、あつ、えくと、これは、お姉ちゃんの悪戯で。」

「どんな姉だよ。」

「ははは。」

家の姉は天災です。

「それより、似合ってるな、本当に男か？」

「男だよ！似合ってるのは、そのー、ありがとう。」

「おっ、おう、それより小さいな〜お前。」

「うるさいな、ほっといてよ。」

「まあ、可愛いからいいんじゃないか。」

「かつ、可愛い、わたしが!？」

「ああ、普通に。」

「ありがと、／＼／＼」

うゝ、男なのに喜んでどうする。

「おっ、おう、（ヤベエ、ドキッてした）そうだ、自己紹介してなかったな、五反田^{ごたんだ} 弾^{だん}だ、よろしく。」

「うん、よろしく弾くん。わたしは夢音 結渡だよ、よろしく。」

「えっ、名前には篠ノ之結歌って。」

「それは、お姉ちゃんの悪戯だから。」

「そ、そうか。よろしくな結歌。」

「結渡だって。」

ポッパ―

『さようなら』

「よう、結渡？俺達皆同じクラスだぜ。」

「本当！やったね。」

久しぶりだなく皆と同じクラス……てか、一回もないじゃん。

「おい、結歌こいつらは？」

ああ、紹介しなきゃ。

「えっと、この男の子は、織斑 一夏で、こっちは、佐藤 優斗、こっちの女子は、夜長 桃華でこっちは凰 鈴音、皆わたしの友達だよ。」

「へー、俺は、五反田 弾だ、よろしく。」

「おう、よろしくな。」

「よろしくね。」

「よろしくお願いします。」

「よろしく。」

ふう、紹介終了。

「て言うか、結渡何で女子の制服なの？さらに名前まで変えて。まさか本当は女の子？」

てか、似合ってるわね。」

「嬉しくないよ。これは、お姉ちゃんの悪戯で。」

「ああ、あの人ならやりそうだな。」

「本当、あんたのお姉ちゃんって、どんな人なのよ。」

本当、災難です。

あ、弾くんが、話についていけない。

「あー、結渡の姉さんは、いろいろ大変なんだよ。体育着、女子の
に変えたり。水着、女子のに変えたり。」

「ははは、そりゃー大変だな。」

「それより、今日どうするんだい。」

「どこにする？」

「なあ、俺ん家来ないか？」

えっ、弾くんの家？

確か、定食屋だっけ。

「俺んち定食屋だからさ。知り合った記念に。」

ほら

「お、いいな、行こうぜ、よろしくな弾。」

「おう。」

と、言うことで、今日は弾くんの家に行きました。
蘭ちゃん可愛かったな。

これがぼくの中学生生活の始まり。

第八話 終わり

第八話 中学（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしくお願いいたします。

次回 第九話

「バイバイ」

帰国する鈴

「卒業式」

中学生生活の終わり

次回

「別れと回想と卒業式」
お楽しみに

第九話 別れ（前書き）

第九話 これで過去の話は終わりです。

第九話 別れ

どうも結渡です。

中学に入学して二年が経ちました。
今、ぼくは空港にいます。

「鈴ちゃん、本当にいいの？一夏達に言わなくて？」
「うん、悲しくなっちゃうから。」
「……そう。」

空港にいる理由は、鈴ちゃんが中国に帰るからだ。

「……じゃあ、何でぼくには言ったのかな？」
「えっ、あっ、それは、あ、あんた女の子みたいだし。」
「うゝ。でも、女の子なら、桃華ちゃんでもいいんじゃない？」
「うっ！それは。あーもう、あんた小さいし、可愛いから、妹がい
たらこんなだろいなって思ってたら、すごく安心してね、なんか
側にいてもらいたかったの。あ、恋とかじゃないからね。ただ、結
渡がいると、なんか癒されるから。」
「ふふ、なにそれ。でもありがとね鈴ちゃん。大丈夫、また僕達会
えるから。」
「予言？ふふっ、当たるといいわね。」
「大丈夫、当たるから。」
「そ、じゃあ。」

ぎゅっ

鈴ちゃんがぼくにだきついってきます。なんか凄く暖かい。

「またね。」

「うん、また。」

鈴ちゃん、行っちゃいました。寂しくなりますね。

まあ、また会えるけど。

それにしても、この二年、いろいろあったな。

千冬さんが第二回モンドグロッソ出たり。

決勝で一夏拐われたり。その時の恩で千冬さん、ドイツ行って、わたしも土日の特訓に行って、ラウラと会ったり、クラリツサさんとアニメの話したり。

鈴ちゃん帰ったり。

まあ、これからも大変ですけどね。

わたしがIS学園行くために、外国とかに恩売らなきゃ。そうしなきゃ、監視とかついたりするから。

最初は一夏の恋人（候補）達に会いに行つてついでに、ISの講義でもしてくれば、良いだろう。

ちなみに、わたしは一回みんなに会いに行ったよ。

今回は、ぼくが会いに行こう。

時は流れ、卒業式

イヤー、今年は大変だったー。
世界中駆け回ったし。
でも、監視とか勧誘とかはやめてもらうことに成功しました。
よかった。

それより一夏は、原作どおりISを起動させましたが、
3日前に、わたしが、ISの適性のやつ政府に測りに行こうとしたら、ISを見たいって、言うから優斗を連れてったら、ISを起動させちゃって、優斗も入学することになりました。

これが神様の言ってた、歪みかな？

それより、優斗は急な出来事だったんで、入学式の次の日に転入することになりました。

一夏には、もちろん白式を上げます。

優斗には、三年前から作ってた、GNドライブの試作機を上げます。
ぼくは、神様にもらったISを使いますよ。

名前は、『ハデス』です。

ISがあるってわかってからは、毎日起動してたし、戦闘訓練してたけど、まだ、二次移項セカンドシフトはしてません。なんでだろう？

あ、終わりました。

さて、帰りますか。

入学までは、ISの調整とかするから、ずっと徹夜かな？

「じゃあね、一夏。」

「おう。」

ちなみに、わたしで入学しますが最初の方は、ぼくでいようと思います。名字は篠ノ之にしますが。

まあ、いずれみんなに、ばらしますけど。

「ただいま。」

こうして、徹夜続きの日々が始まりました。

第九話終わり

第九話 別れ（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしくお願いします。

次回 第十話

「織斑くん！」

呼ばれる一夏

「げえ関羽!？」

現れる英雄？

パアンッ!

炸裂する必殺

次回

「入学と英雄と出席簿」

お楽しみに

第十話　IS学園入学　魔王チツフーユ登場？（前書き）

今回から原作突入です！

第十話　IS学園入学　魔王チップーユ登場？

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー。」
ショートホームルーム

どうも、結渡です。

今日は、IS学園入学式の日です。

ちなみに、中学の卒業式からずっと徹夜だったから、昨日は1日寝てました。

今は入学式が終わって、山田先生が話しています。
相変わらず子供みたいな先生ですね。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」
「……………」

今、教室は異様な雰囲気に使われていて、誰からも返事がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号で。」

出席番号かじゃあ箒ちゃんの後か。

それにしても、六年でこんなに綺麗になるもんだな。

それより、視線がすごいな。

まあ、それもそうだな、クラスのぼくと一夏以外が女子なんだから。

さらに、ぼくは公表されてないし、女の子みたいだし。

馴れててもまあ、これはつらいな。

あつ、次一夏だ。って、一夏ボーツとして気づいてない。

「織斑君織斑 一夏君っ。」

「は、はいっ!？」

いきなり名前を呼ばれで驚いてるよ。

周りの女子からは、クスクス笑い声が聞こえる。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい、お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンねゴメンね！でもね、あのね？自己紹介、『あ』から始まって今『お』ね織斑君なんだよね、だからねご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

あーあ、一夏が先生に迷

惑掛けてるよ、っていうかこの人本当に大人か？

「いや、あの、そんなに謝んなくても……っていうか自己紹介しましから、落ち着いてください。」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ、絶対ですよ。」

山田先生が、一夏の手を取って詰め寄っている。すごい注目されている。

一夏は、後ろを向いた。少し引いてる。やっぱり視線を直に見ると

怖いよな。

篝ちゃんは、一夏をチラチラ見ては、何か呟いてる。

「えー……えっと、織斑　一夏です。よろしくお願いします。」

おー、出だしは上々。

さあ次は、あれー、なんか困ってる、まさかネタ無し！

あつ、こっち見た。止めて助けを求めないで。

なんか覚悟を決めた一夏は、深呼吸した。

「以上です。」

がたたっ、思わずずっとこける女子、ひっくり返り腹を抱えるぼく。

「あ、あのー……」

あつ、ヤバい、魔王様がきた。早く直さなきゃ。

あつぶなかったー。

パンツ！

ふう、出席簿は回避した、これで安心。

「いっ——！？」

あーあ、ドンマイ。

叩かれた頭を押さえたまま、一夏は、恐る恐る後ろを向いた。

「げえっ、関羽!？」

パンツ!

あーあ、バカだろあいつ。

さらに、関羽じゃなくて、ドラ○エの竜○（第一形態）辺りだろ、いや、ハー○ン辺りか？

ブン！（千冬さんの出席簿が降り下ろされた音）

ヒュ！（ぼくが避けた音）

バコーン！（ぼくが殴られた音）

痛ってー。

「誰が三國志の英雄だ馬鹿者、そして、お前失礼なこと考えたろ。」

なぜわかった。くそいてー、それにしても久しぶりだな。

千冬さんがIS学園の教師
になって以来かな。

「お、織斑先生、会議は終わられたんですか。」

「ああ、山田君。クラスえのあいさつを押し付けてすまなかったな。」

なにこのやさしさ本当に千冬さん？あっ、でもわたしにもこんな感

じか。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

「諸君、私が織斑 千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。まあ一人、それが足りないやつがいるんだがな。まあ、私の言うことは良く聴き良く理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」

千冬さんは、相変わらずだなあ。

まあ、強いからいいけど。ぼくの武術の師匠だし。

あ、ヤバい、ハデスお願い。

（わかった。）

「キャー！ー！千冬様本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

いや別にどこからでもいいだろ。

外国からも来るんだから。

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

最初の実際に受けたら嫌になるよ。

そして最後の人、命を粗末にしちゃダメだよ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるもんだな。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスだけに馬鹿者を集中させているのか？」

千冬さん多分後者だよ。

でもそんなにうっとうしがらなくても、人気は買えないんだから。もうちょつと優しくしようよ。

と思ったぼくが甘かった、一夏も同じようなことを思ったんだろう。そう、ケーキに甘いものをありったけ乗せたりかけたりしたぐらい甘かった。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

クラスメイト達が元気でなによりだ。

多分プライベートの千冬さんを見たらがっかりするよ。

それよりどういうことだよ、ハデスに聴力下げてもらって耳せんしたのに耳がいたい。

はあ、もういいや、

（ハデス解除していいよ）

（わかった）

はあ、耳がいたい。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は。」

そうだぞ全く、一夏のせいで後頭部が痛いんだよ。

「いや、千冬姉、俺は――」

はい死亡フラグ。

パンツ！

本日三度目の必殺出席簿アタック！

「織斑先生と呼べ。」

「……はい、織斑先生。」

良く考えたら、今姉って呼んじゃったよね、あゝあ一夏のバカ、
また耳が痛くなるよ。

「え……？織斑君ってあの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界初の男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……。」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ。」

あれ意外と騒がなかった。

最後の人代わったら3日で、やめたくなるよ。

今一夏は、世界初の『IS』を使える男ということで、ここIS学園にいる。

IS学園っていうのは、簡単に言うと、

『日本人が作ったISで俺等混乱してるから責任もって人材管理と育成の学校作れや。そこの技術よこせや。あ、金は出さないから』

と言うことだ。

どうでもいいけど。

まあ、これはわたしの講義やら何やらで、少し改善されたけど。

そんなこと思っているとチャイムが鳴る。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。そのあと自習だが基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

おー、酷いねー。

まったく基礎知識かー、半月は暇だな。

何しよう、紅椿の資料お姉ちゃんに送ってもらうかな。

「席につけ馬鹿者。」

それとも、あつ、GNドライブの調整でもするか。

終わったら、新装備でもつくるか。

第十話終わり

第十話 I S学園入学 魔王チツフーユ登場？（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしくおねがいます。
次回 第十一話

「あー……」

嘆く一夏

「箒？」

六年ぶりの再会

次回

「嘆きと再会と馬鹿な一夏」
お楽しみに

第十一話 妹と再会 うなだれる一夏（前書き）

明日から学校が始まるんで投稿が遅れます
すいません

第十一話 妹と再会 うなだれる一夏

「あー……」

どうも結歌です。

今は、一時間目の授業が終わって休み時間です。

隣では一夏がうなだれています。

えっ、ぼく？

ああ、空中投影タイプのPCで、GNドライブの調整しています。授業中は、ステルス使ってぼく以外に見えないようにしてやっていたが、今は解いてやっています。

でも、企業機密なのでディスプレイは、見えないようにしています。

それにしても、世界初の男のIS操縦者と謎の男の子（娘）がいるせいか、二、三年の先輩が詰め掛けてます。

でも、二人しかいない男子には話しかけずらいのか、はたまた、ぼくが周りから見たら意味不明な行動しているせいか、全然話しかけて来ません。

「……ちよつといいか」

「え？」

んっ、誰だ？ どうせ一夏目当ての人だらけど。

「箒？」

「……………」

えっ、箒ちゃん？ まさか、一夏に告白？ な訳ないよね。

相変わらず白いリボンが可愛いです。

それにしても、六年でまさかこんなに大きくなるなんて、お姉ちゃん悔しい。

っていつても、わたしは、小さくないし大きくもない俗に言う普通です。

でも高校生から見たらでかいのかな？

「廊下でいいか？」

別に教室でも変わんないんじゃない？

「早くしろ」

「お、おう」

「……………」

じー

あれ、箒ちゃんに見られてる。

「おねえ——」

「あー、わかった、いこうね、箒ちゃん（今は、お兄ちゃんね）」

「はあ、（どういふことですか？）」

「じゃあ行こうか（詳しい話は放課後ね）」

廊下に出ると、女子達がさあゝ、と道を開け、ドーム状にぼく達を囲みます。

「「そういえば」」

「何だ？」

おっ、一夏も同じことかな？
じゃあ一夏の後で、いいや。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「箒ちゃん、箒ちゃん、ばく見に行ったよ」

「……………」

あれ？口をへの字にして顔を赤らめた。

あつ、一夏に誉められて照れてるのか。可愛いな。

「なんでそんなこと知っているんだ」それに、お兄ちゃんは、男子の部に出場して優勝してたでしょ！」「なんでって、新聞で見たし……………」

「えへへ、ばれてたか。名前変えて出たのに」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ。お兄ちゃんは、顔見ればわかるでしょ」

えへへ、わかってたんだ。嬉しいな。

「あー、あと」

「な、何だ!？」

「……………」

「あ、いや……………」

箒ちゃん、今のはないよ。いくら興奮してるからって。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ」
「え……………」

「ほら、髪型一緒だし」

相変わらず、このフラグ魔め！

ぼくは、男子から告白されてるっていうのに。
呪うぞ！

「よ、よくも覚えているもんだな……」

「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」
「……………」

怒らないで、これが一夏だよ。

キンコーンカーンコーン

おっと、そろそろ戻らないと。千冬さんがきます。

「俺達も戻ろうぜ」

「わ、わかつている」

一夏達が戻ってくる。

あつ、ぼく？もうついてるよ、席に。

あつ、一夏が止まった。

千冬さんが来た。

一夏南く無く

パンツ！

「とっとと席につけ、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

バカだなく、一夏。

ポッパ

「——であるからして、ISの基本的な運用は現状で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は刑罰によって罰せられ——」

あゝ、暇だすごい暇だ。

GNドライブの調整終わったし、機体の方も終わっちゃったから暇だよ。

あつ、隣で一夏がなんか教科書見て困った顔してる。

「（一夏どうしたの？）」

「（ああ、これ全然わかんなくて）」

それは自業自得だよ。

ぼくには、どうしようもない。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

ぼくと一夏のやりとりになじったのか、山田先生が訊いてきます。

「あ、えっと……」

良かったじゃないか一夏、天使様が来たぞ。

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生なんですから」

全然そうは見えませんがね。どうでもいいけど。

「（良かったね一夏、頼れる先生が来たぞ）」

「（そうなのか？）」

「そうだよ。先生にわからないところ訊きなよ」

「（そうだな）先生！」

「はい、織斑くん！」

まあ、訊いても千冬さんに叩かれるんだけど。

「ほとんど全部わかりません」

はあ、本当馬鹿だよ一夏。

「え……。ぜ、全部ですか……？」

ほら、先生が困ってるよ。

「え、えっと……織斑くん以外でわからないって人はどれぐらいいますか？」

ピシッ

ぼくが手を上げると、一夏は仲間がいて安堵し、千冬さんやクラスメイトは、驚愕に目を見開いています。

本当馬鹿だな。ISの製作者がわかんないところあるとでも思ったのか？

「えっと、篠ノ之くんどこがわからないのかな、先生に訊いてもいいよ」

これ絶対ぼくを子供扱いしてるよね！

「はい、一夏の頭が理解できません。あと、山田先生がなんでぼくを子供扱いするのか、わかりません！」

ズコー

女子の半分が芸人みたいに転びました。
残りの半分は、

「篠ノ之くんって子供じゃなかったのとか、話しています。」

山田先生何、

「えっ！子供じゃなかったんですか？」

みたいな顔してるんですか。

もうやだ、泣きたい。

千冬さんは、大爆笑してますよ。

「……織斑、ひー、入学前の参考書は読んだか？それと篠ノ之、それは賛成だが、授業中にふざけるな」

千冬さん、お腹抱えて笑ってふざけるなって言っても、説得力ないですよ。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

はははは、本当面白いよ一夏は。

お腹痛いよ。

ていうか、千冬さん切り替え早っ！

「必読と書いてあったろうが馬鹿者」

千冬さんは、笑いを乗り越して呆れています。

「あとで再発行しつやるから一週間以内に覚えろ。いいな」「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと…」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

あゝ疲れた。くるしー。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を――」

バン！

ぼくは机を叩き立ち上がる。

「千冬、ISを兵器だなんて言うんじゃない」

ISはお姉ちゃんとわたしが、皆が宇宙に行けたらいいなって作っ
たんだ。兵器にしたのは、世界のくずどもだ。

ISを兵器だなんて絶対言わせない。

「あ、ああ、すまなかった。だが、人を殺すことができるものだと
理解しておくように」

「はい」

いけない、怒りすぎて殺気出してた、怖がらせちゃったかな？
怖がらせちゃったよね。

山田先生とか泣きそうだもん。

後ろの子達に、謝って。

ふう、落ち着け。

ぼくはこの後の授業は聞いてなかった。

第十一話 終わり

第十一話 妹と再会 うなだれる一夏（後書き）

誤字、脱字、感想、アドバイスなどありましたらお願いします

次回 第十二話

「ちょっとよろしくて」
セシリア登場！

「決闘ですわ！」
降られる喧嘩

「私も入れてくれないか」
「僕もいいよね？」
それに乱入するものたち

次回

「決闘と乱入と新キャラ登場」
お楽しみに

第十二話 代表候補生セシリア登場！（前書き）

セシリア登場＋新キャラ登場！

更新はだいたい四日に一回ぐらいのスピードになると思います。
では、第十二話どうぞ

第十二話 代表候補生セシリア登場！

ふう、やっと落ち着いた。

どうも、結渡です。

あれから一時間、やっと怒りが収まりました。

そして今は、二時間目の休み時間です。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「はい？」

ぼくは、声を掛けられたので振り向くと、そこには、金髪、白い肌の少女、

「セ、セシリー！」

そう、セシリア・オルコットがいた。

「なんで貴方がその呼び方をして、結渡さん！？」

「セシリー、久しぶり〜」

イヤー、一年ぶりかなー？ 変わってないな〜。

「なんで貴方がここに？」

「男でIS使えて、篠ノ之 束の弟？ だからかな」

「あつ、そういえばそうでしたね」

「結渡、知り合いか？」

「うん。セシリーは二日しか、一緒にいなかったけど大切な友達」

ぼくが初めて会ったのは、講義の時だっけ。

「相変わらず、ISを兵器と言われるのは嫌いなのですわね」

「まあね、お姉ちゃんは、宇宙に行きたくて作ったから」

二日目の講義の日に、イギリスのお偉いさんが、ISを兵器って言ったからキレて、セシリー達を怖がらせちゃったをだよ。

「それよりあなた、訊いてます？お返事は？」

「ああ、訊いてるけど……どういう用件だ？」

まったく、やる気のない返事だなく。

「まあ、なんですよ、そのお返事。わたくしに話かけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないかしら」

こういう見下したような言い方が、いけないって言ったのになく。

「悪いな。俺、君が結渡の知り合いってこと以外知らないし」

まあ、仕方ないな。自己紹介一夏で終わったし。
初対面だし。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

へー、セシリー主席なんだ。凄いな。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

はあ、頭いたい。まったく呆れたよ。

「あ、あ、あ……。」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの？」

セシリー、一夏は本気だよ。
なにせ、これが一夏だから。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……。」

セシリー、テレビはあるよ。そいつが馬鹿なだけ。

「で、代表候補って？」

「一夏、代表候補生っていうのは、国家代表になるかもしれない人のこと。まあ、エリートっていうやつ。単語から想像できるでしょ」
「たしかに」

はあ、やっとか。

馬鹿に教えるのは大変だ。

「そう、エリートなのですわ！」

まあ、ぼくや千冬さんから見たらまだ、ひよっ子だけどね。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じにするだけでも奇跡……そう、幸運なのよ。その事実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ。」

「本当ラッキーだね。いっぱい生徒がいるのに、セシリーとおなじクラスになれて。嬉しいな」

「……あなた馬鹿にしていますの？ 結渡さんわたくしも嬉しいですわ。」

セシリーもぼくと一緒に嬉しいんだ。

「大体あなたISについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。世界で初めてISを操縦で操縦できるときいてましたから、少しぐらい知的さを感じさせてるかと思っていましたが、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

態度は悪いが、誰にでも優しい。

これがセシリーのいいところだ。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

まあ、入試の時先生方は力を抑えてるんだけど。

「入試って、あれか？ ISを動かし戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「お前はどうかだった？」

「ぼくはダメだったよ。イヤー武器が耐えられなかったみたい」

「そ、そうか。そういえば誰と戦ったんだ？」

「え、ああ、千冬さんだよ。強かったな」

「武器壊れるってどういう事だよ」

「イヤー、剣振るスピードが音速普通に越してたら。やっぱり、専用機じゃなきゃ使いづらいね」

武器が脆すぎるからね。

「わたくしだけと聞きましたが？」

「女子だけってオチじゃないか？」

専用機でやれば勝てたのかな？

でもまあ、公平じゃなきゃ勝っても意味ないからいいか。

「つまり、わたくしだけじゃないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したっていうの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けよ。な」

「一回落ち着こう。ね？」

「こ、これが落ち着いていられ――」

キンコンカーンコン

「っ……！またあとで来ますわ！にげないことね！いいこと！？」

いや、逃げないから。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い千冬さんの授業なので、うかつにPCをいじれない。

あー、暇だ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

なんで、そんな大切な事をついでみたいに言ってるの！？

まあ、ぼくは生徒会に入りたいからパスしたいけど、どうせ推薦されるんだろうな。

「はい。織斑くんを推薦します」

ドンマイ一夏。

「私もそれがいいと思います」

「私は篠ノ之くん？がいいと思います」

はい来ましたよ。

なんで、『くん』であってる？みたいに言う？

「では、候補は織斑一夏と篠ノ之結渡……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

どうせ、決闘になるから、圧勝して一夏に弱いからって押し付けられればいいや。

「お、俺!？」

うるさいな。

どうせ僕達に拒否権はない。

「織斑。席につけ、邪魔だ。さて他にはいないか？いないならこの二人で投票するぞ。」

「ちょ、ちよつとまった!俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない、少しは篠ノ之を見習え。」

見習えって、ぼくただボーツとしてただけなんだけどな。

「い、いやでも——」

「待ってください!納得が行きませんわ!」

よし、原作どおり。

これで、絶対決闘になる。

「篠ノ之さんはいいとして、そのような選出は認められませんか!大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ!わたくしに、セシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

ぼくはいいんだ。どうでもいいけど。

「実力から行けばわたくしか篠ノ之さんがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由だけで極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国にまでISの技術の修練に来たのであって、サーカスするきは毛頭ございませんわ！」

ぼくもいちよう日本人なんだけど。

「いいですか！？クラス代表は実力トップになるべきそしてそれはわたくしですわ！」

ほう、ぼくに勝つ自信があるのか。面白い。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

あゝあ、言っちゃった。

イギリスにも美味しい料理はいちようあるぞ！

「なっ……！？」

怒っちゃった。

まあ、セシリーも悪いけど、一夏も祖国を愛している人の祖国を侮辱しちゃだめだよ。

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

最初に悪口言ったのセシリーだけだね。

「決闘ですわ！」

よし来た。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣——」

「その勝負私も入れてくれないか？」

「「え!?!」」

そう言って立ったのは、アメリカ代表候補生のイリア・シュバルツさん。

二つ名は『ルシファア』アメリカでは有名だ。

「どういことですか、シュバルツさん」

「ああ、イリアでいいぜ。私が戦いたいのは、お前じゃなくてそっち」

そう言って指差したのはぼく、えっ!?!? ぼく!?!?

「おい、オルコットそいつは強いんだろ」

「ええ、そこらへんの候補生よりは」

「私は強いやつと戦いたいんだよ。いいだろオルコット」

そうセシリーにたのむ。

あれ、普通ぼくに聞くんじゃ?

「ええ、まあいいですけど」

えっ!?! いいのかよ!
まあ、いいですけど。

「では、勝負は一週間後の月曜と火曜の放課後大三アリーナで行う。
織斑、オルコット、篠ノ之、シュバルツはそれぞれ準備をしておけ。
それでは授業を――」

ガラ

「その勝負ちょっと待ったー」

「はあ、なんだ転入は明日じゃないのか?」

「イヤー、結渡達と同じクラスって聞いたから急いで書類とか終わ
らせて来たら、面白そうな話してたから入れてほしいな〜って、い
いよね? オルコットさん」

「え、ええ、まあいいですけど」

「それよりどっちにいるの?」

「一夏のほうで」

即答か。

「まあいい、ほれ自己紹介しろ」

「はい。えー、今日から転入でいいのかな? 佐藤 優斗です。よろ
しく」

ニコッ

ヤバイ、くる、あれが。

「キャー！、三人目の男子キター！」

「しかも、かっこいい！」

「ヤバい、惚れるかも！」

くそ、なんて威力だ。

耳が……！

「はあ、静かにしろ。お前は席につけ」

そう言うと、優斗はセシリーの隣の席に向かう。

「よろしくね。オルコットさん」

そう言って、笑顔を向け挨拶してから席に座る。

あつ、セシリーの顔が赤くなってるような。

さすが一夏に続くフラグ魔王だ。

そうだ、あとであれ渡そう。

第十二話 代表候補生セシリア登場！（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらお願いします。

次回 第十三話

「箒」

一夏にラッキータイム到来

「パス」

見事な姉妹の連携

結歌再登場

次回

「変態と再来と同居人」
お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703z/>

IS 歪んだ世界

2012年1月13日22時55分発行